

区分一覧表 「健康の保持」

項目	項目の内容	状態例	具体的指導内容例と留意点
(1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること	<input type="checkbox"/> 体温の調節 <input type="checkbox"/> 健康状態（覚醒と睡眠など）の維持・改善に必要な生活のリズムの獲得 <input type="checkbox"/> 食事や排泄などの生活習慣の形成 <input type="checkbox"/> 衣服の調節 <input type="checkbox"/> 室温の調節や換気 <input type="checkbox"/> 感染予防のための清潔の保持など健康な生活環境の形成	覚醒と睡眠のリズムが不規則なことが多い。また、体力が弱かったり、食事の量や時間、排泄の時刻が不規則になったりする。	1日の生活状況（覚醒と睡眠のリズム、食事及び水分摂取の時間や回数・量など）や体調に関する情報（呼吸機能、体温調節機能、服薬の種類や時間、てんかん発作の有無とその状態など）を把握し、基礎的な生活のリズムが身に付くようにする。
		視覚障がいがあるため、昼夜の区別がつきにくいことから覚醒と睡眠のリズムが不規則になり、昼夜逆転した生活になる。	困難の要因を明らかにした上で、無理のない程度の課題から取り組む。生活のリズムや生活習慣の形成は、日課に即した日常生活の中で指導をする。
		特定の食物や衣服に強いこだわりを示す場合があり、極端な偏食になったり、季節の変化にかかわらず同じ衣服を着続けたりする。	困難の要因を明らかにした上で、無理のない程度の課題から取り組む。清潔や衛生を保つことの必要性を理解できるようにし、家庭等との密接な連携の下に不衛生にならないように日常的に心掛けられるようにする。
		相手からどのように見られているのかを推測することが苦手なため、整髪や着衣の乱れなど身だしなみを整えることに関心が向かない。	困難の要因を明らかにした上で、無理のない程度の課題から取り組む。生活のリズムや生活習慣の形成は、日課に即した日常生活の中で指導をする。
		周囲のことに気が散りやすいことから一つ一つの行動に時間が掛かり、整理・整頓などの習慣が十分身に付いていない。	家庭と連携を図って、朝決まった時刻に起きることができるようし、日中は、身体を動かす活動や遊びを十分に行って目覚めた状態を維持したり、規則正しい食事をとったりするなど生活のリズムを形成するための指導を行う。日中の活動を計画する際には視覚や聴覚等の保有する感覚を活用するよう活動内容を工夫する。また、自分では身体を動かすことができなくても、教師が補助をして身体を動かすような活動を取り入れることによって覚醒を促すことなども効果的である。 (★「4環境の把握」「5身体動き」)
		自分の体調がよくない、悪くなりつつある、疲れているなどの変調が分からず無理をしてしまうことがある。その結果、体調を崩したり、回復に非常に時間が掛かったりする。	規則正しい生活をする事の大切さを理解したり、温度に適した衣服の調節をすることを身に付けたりするよう指導する。また、体調を自己管理するために、客観的な指標となる体温を測ることを習慣化し、体調がよくないと判断したときの対応を保護者や教師と相談できるよう指導することも考えられる。こうした健康に関する習慣について指導する場合には、自己を客観視するため、例えば、毎朝その日の体調を記述したり、起床・就寝時刻などを記録したりして、スケジュール管理をすること、自らの体内の感覚に注目することなどを指導する。 (★「3人間関係の形成」「4環境の把握」「6コミュニケーション」)
(2) 病気の状態の理解と生活管理に関すること	<input type="checkbox"/> 病気の状態の理解と改善 <input type="checkbox"/> 病気の進行の防止に必要な生活様式を理解 <input type="checkbox"/> 生活の自己管理	食生活や運動不足等の生活習慣と関連する2型糖尿病である。	自己の病気を理解し血糖値を毎日測定して、病状に応じた対応ができるようにするとともに、適切な食生活や適度の運動を行うなど主体的に生活管理を行い、病気の進行を防止するよう指導する。
		二分脊椎により、長時間同じ座位をとることで褥瘡（じょくそう）ができる。	定期的に姿勢変換を行うよう指導する。
		進行性の疾患がある。	病気を正しく理解し、日々の体調や病気の状態の変化に留意しながら、適度な運動を行い、身体機能の低下を予防するよう、生活の自己管理に留意した指導を行う。
		うつ病などの精神性の疾患があり、食欲の減退などの身体症状、興味や関心の低下や意欲の減退などの症状が見られるが、それらの症状が病気によるものであることを理解できない。	医師の了解を得た上で、病気の仕組みと治療方法を理解するように指導する。ストレスが症状に影響を与えることが多いので、例えば、日記を書くことでストレスとなった要因に気付いたり、小集団での話し合いの中で、ストレスを避ける方法や発散する方法を考えたりするなど、自らその軽減を図ることができるよう指導する。
		口蓋裂の既往歴があり、滲出性中耳炎やむし歯などになりやすい。	日頃から聞こえの状態に留意したり、丁寧な歯磨きの習慣形成に努めたりするなどして、病気の予防や健康管理を自らできるようにする。
		てんかん発作のなかで、短時間意識を失う小発作の場合には、発作が起きているのを本人が自覚しにくいことから、自己判断して服薬を止めてしまう。	定期的な服薬の必要性について理解させるとともに、確実に自己管理ができるよう指導する。

<p>(2) 病気の状態の理解と生活管理に関すること</p>	<p><input type="checkbox"/>病気の状態の理解と改善 <input type="checkbox"/>病気の進行の防止に必要な生活様式の理解 <input type="checkbox"/>生活の自己管理</p>	<p>小児がんの経験がある。</p> <p>てんかんがある。</p> <p>てんかんがあるが、他の障がいを伴っているため、生活上の留意事項を理解し守ることや定期的な服薬が難しい。</p>	<p>治療後に起きる成長障がいや内分泌障がい等の晩合併症のリスクがあることを理解して、体調の変化や感染症予防等に留意するなど、病気の予防や適度な運動や睡眠等の健康管理を自らできるようにする。</p> <p>てんかんの発作は、全身がけいれんするもの、短時間意識を失うもの、急に歩き回ったり同じ行動を意味もなく繰り返したりするものなど多様であるため、身体症状だけでは分かりにくいことがある。そのため、発作が疑われるような行動が見られた場合には専門の医師に相談する。また、定期的な服薬の必要性について理解するとともに、服薬により多くの場合は発作をコントロールできるという安心感を持たせる。 (★「2心理的な安定」)</p> <p>コミュニケーション手段や理解の状況、生活の状況等を踏まえて、例えば、疲労を蓄積しないことや、定期的に服薬することを具体的に指導したり、てんかんについて分かりやすく示した絵本や映像資料などを用いて理解を図ったりする。また、ストレスをためることがてんかん発作の誘因となることがあるので、情緒の安定を図るように指導する。注意事項を守り服薬を忘れないようにするためには、周囲の人の理解や協力を得ることが有効な場合があるため、発達の段階等に応じて、自分の病状を他の人に適切に伝えることができるようにする。 (★「2心理的な安定」「6コミュニケーション」)</p>
<p>(3) 身体各部の状態の理解と養護に関すること</p>	<p><input type="checkbox"/>病気や事故等による神経、筋、骨、皮膚等の身体各部の状態の理解 <input type="checkbox"/>身体各部位の適切な保護と症状の進行の防止</p>	<p>視覚障がいがある。</p> <p>聴覚障がいがある。</p> <p>下肢切断によって義肢を装着している。</p> <p>長時間寝たきりの状態により、床ずれ等がある。</p> <p>筋萎縮等により筋力が低下し、運動機能などの各機能が低下する筋ジストロフィーである。</p>	<p>発達の段階に応じて、眼の構造や働き、自己の視力や視野などの状態について十分な理解を図る。その上で、保有する視機能を維持するため、学習中の姿勢に留意したり、危険な場面での対処方法を学んだりして、視覚管理を適切に行うことができるように指導する。</p> <p>発達の段階に応じて、耳の構造や自己の障がいについての十分な理解を図る。その上で、補聴器等を用いる際の留意点についても理解を促すなどして、自ら適切な聞こえの状態を維持できるよう耳の保護に関わる指導を行う。</p> <p>義肢を装着している部分を清潔に保ったり、義肢を適切に管理したりすることができるようにする。</p> <p>患部への圧迫が続かないように、定期的に体位を変換することの必要性を理解させ、自分で行う方法を工夫したり、自分でできない場合には他の人に依頼したりできるようにする。</p> <p>身体の状態に応じて運動の自己管理ができるように指導する。特に、心臓機能や呼吸機能の低下は命に関わることであり、筋肉に過度の負担を掛けないように留意しつつ機能低下を予防することが重要である。そのため、病気の原因や経過、進行の予防、運動の必要性、適切な運動方法や運動量などについて学習させる。その際、治療方法や病気の進行、将来に関する不安等を持つことがあるので、情緒の安定に配慮した指導を行う。また、病気の進行に伴い、姿勢変換や移動、排泄などの際に周囲の人に支援を依頼することが必要になってくるので、場や状況に応じたコミュニケーション方法について学ばせる。(★「2心理的な安定」「6コミュニケーション」)</p>
<p>(4) 障がいの特性の理解と生活環境の調整に関すること</p>	<p><input type="checkbox"/>自己の障がい特性の理解及び学習上又は生活上の困難さの理解 <input type="checkbox"/>状況に応じた、自己の行動や感情の調整及び他者に対する主体的な働き掛けによる学習や生活環境づくり</p>	<p>吃音に関する知識を得る機会がなく、吃症状が生じることへの不安感や恐怖感を持ち、内面の葛藤を一人で抱えている。</p> <p>感覚の過敏さやこだわりがあり、大きな音がしたり、予定通りに物事が進まなかったりすると、情緒が不安定になる。</p> <p>学習や対人関係がうまくいかないことを感じている一方で、自分の長所や短所、得手不得手を客観的に認識することが難しかったり、他者との違いから自分を否定的に捉えていたりする。</p> <p>視野の障がいがあり、見える範囲に限られることにより周囲の状況把握に困難が生じるため、慣れている学校内であっても環境の把握が十分ではない。</p>	<p>安心した場の中で、吃音について学び、吃音についてより客観的に捉えられるようにする。また、発達の段階や吃症状の変化等に応じて、周囲の人へ「どうしてほしいのか」等を伝える方法を話し合う。</p> <p>自分から別の場所へ移動したり、音量の調整や予定を説明してもらうことを他者に依頼したりするなど、自ら刺激の調整を行い、気持ちを落ち着かせることができるようにする。</p> <p>個別指導や小集団などの指導形態を工夫しながら、対人関係に関する技能を習得するなかで、自分の特性に気付き、自分を認め、生活する上で必要な支援を求められるようにする。</p> <p>自分の見え方の特徴を理解した上で、部屋に置かれた様々な物の位置などを自ら触ったり、他者から教えてもらったりしながら確認する。その際、物の位置関係を把握しやすいように、順序よく丁寧に確認できるようにする。また、自分に分かりやすいように整理したり、置く場所を決めたりしておく。さらに、必要以上に行動が消極的にならないように情緒の安定を図る。 (★「2心理的な安定」「3人間関係の形成」「4環境の把握」)</p>

<p>(4) 障がいの特性の理解と生活環境の調整に関すること</p>	<p><input type="checkbox"/> 自己の障がい特性の理解及び学習上又は生活上の困難さの理解 <input type="checkbox"/> 状況に応じた、自己の行動や感情の調整及び他者に対する主体的な働きかけによる、学習や生活をしやすい環境づくり</p>	<p>聴覚障がいがある。</p>	<p>どのような音や声が聞こえて、どのような音や声が聞き取れないのかを自分でしっかりと理解し、時と場合によって聞こえたり聞こえなかったりすることに気付かせる。卒業後、自分の聞こえの状況や最も理解しやすいコミュニケーションの方法を自ら他者に伝えていくことが、聞こえる人との円滑なコミュニケーションにつながる。そのため、聴覚活用に加え、手話や筆談など、他者とコミュニケーションを図るための様々な方法があることを理解し、その中で自分が分かりやすいコミュニケーションの方法を選択できるようにすることが大切である。 (★「2心理的な安定」「6コミュニケーション」)</p>
<p>(5) 健康状態の維持・改善に関すること</p>	<p><input type="checkbox"/> 運動量の減少及び体力低下の防止 <input type="checkbox"/> 日常生活における適切な健康の自己管理</p>	<p>障がいが重度で重複しており、健康の状態を明確に訴えることが難しい。</p> <p>たんの吸引等の医療的ケアを必要とする。</p> <p>運動量が少ないことにより、肥満ぎみであったり体力低下を招いたりする。また、心理的な要因により不登校の状態が続き、運動量が極端に少なくなったり、食欲不振の状態になったりする。</p> <p>心臓疾患があり、運動が制限されていても、その範囲を超えて身体を動かしてしまい病気の状態を悪化させてしまう。</p>	<p>様々な場面で健康観察を行うことにより、変化しやすい健康状態を的確に把握する。その上で、例えば、乾布摩擦や軽い運動を行ったり、空気、水、太陽光線を利用して皮膚や粘膜を鍛えたりして、血行の促進や呼吸機能の向上などを図り、健康状態の維持・改善に努めるようにする。</p> <p>健康状態の詳細な観察が必要であることや、指導の前後にたんの吸引等の医療的ケアが必要なことから、養護教諭や看護師等と十分連携を図って指導を進める。</p> <p>体力低下を防ぐために、運動することへの意欲を高めながら適度な運動を取り入れたり、食生活と健康について実際の生活に即して学習したりするなど、日常生活において自己の健康管理ができるようにする。</p> <p>心臓疾患の特徴、治療方法、生活管理などについて、個々の発達の段階等に応じて理解ができるようにするとともに、自分の健康の状態を把握し、その状態に応じて日常生活や学習活動の状態をコントロールしたり、自ら進んで医師に相談したりできるようにする。これらの指導を行う際には、生活管理や入院生活から生じるストレスなどの心理的な側面にも配慮するとともに、実施可能な運動等については学校生活管理指導表等を参考にしながら可能な限り取り組めるようにするなどの配慮を行う。 (★「2心理的な安定」)</p>

区分一覧表 「心理的な安定」

項目	項目の内容	状態例	具体的指導内容例と留意点
(1) 情緒の安定に関する こと	□情緒の安定	心理的に緊張したり不安になったりする状態が継続し、集団に参加することが難しい。	環境的な要因（睡眠、生活のリズム、体調、天気、家庭生活、人間関係など）を明らかにし、情緒の安定を図る指導をするとともに、必要に応じて環境の改善を図る。
		白血病治療の副作用による貧血や嘔吐などが長期間続くことにより、情緒が不安定な状態である。	悩みを打ち明けたり、自分の不安な気持ちを表現できるようにしたり、心理的な不安を表現できるような活動をしたりするなどして、情緒の安定を図る。
		入院と退院を繰り返していたり、退院後も感染予防のため学校に登校できにくい状態であったりする。	テレビ会議システム等を活用して学習に対する不安を軽減するような指導を工夫する。
		他者に自分の気持ちを適切な方法で伝えることが難しいため、自傷行為や、他者に対して不適切な関わり方をしてしまう。	自分を落ち着かせることができる場所に移動して、慣れた別の活動に取り組むなどの経験を積み重ねていきながら、その興奮を静める方法を教える。また、様々な感情を表した絵カードやメモなどを用いて自分の気持ちを伝えるといった手段を身に付けられるように指導する。
		自分の行動を注意されたときに、反発して興奮しやすい。	自分を落ち着かせることができる場所に移動してその興奮を静めることや、一旦その場を離れて深呼吸するなどの方法があることを教え、それらを実際に行うことができるように指導する。
		注意や集中を持続し、安定して学習に取り組むことが難しい。	刺激を統制した落ち着いた環境で、必要なことに意識を向ける経験を重ねながら、自分に合った集中の仕方や課題への取り組み方を身に付け、学習に落ち着いて参加する態度を育てていく。
		生活全般において自信を失っているため、自分の思う結果が得られず感情的になり、情緒が不安定になる。	本人が得意なことを生かして課題をやり遂げるように指導し、成功したことを褒めることで自信を持たせたり、自分の良さに気付くことができるようにしたりする。
		不安や緊張が高まった状態になると、チックの症状により、身体が動いてしまったり、言葉を発してしまったりする。	不安や緊張が高まる原因を知り、自ら不安や緊張を和らげるようにする方法を身に付ける指導をする。
		障がいや重度で重複しているため、情緒が安定しているかどうかを把握することが難しい。	判断の手掛かりとして「快」、「不快」の表出の状態を読み取ることが重要である。そして、安定した健康状態を基盤にして「快」の感情を呼び起こし、その状態を継続できるようにするための適切な関わり方を工夫する。
		障がいがあることや過去の失敗経験等により、自信をなくしたり、情緒が不安定になったりする。	機会を見つけて自分の良さに気付くようにしたり、自信が持てるように励ましたりして、活動への意欲を促すように指導する。
(2) 状況の理解と変化への対応に関する こと	□場所や場面の状況の理解と心理的抵抗の軽減 □変化する状況の理解と適切な対応方法の習得	心理的に緊張しやすく、不安になりやすい傾向がある。また、身体面では、嘔吐、下痢、拒食等様々な症状があり、日々それらが繰り返されるため強いストレスを感じる。そのため、集団に参加することが難しい。	教師が病気の原因を把握した上で、本人の気持ちを理解しようとする態度で関わる。その上で、良好な人間関係作りを目指して、集団構成を工夫した小集団で、様々な活動を行ったり、十分にコミュニケーションができるようにしたりする。 (★「3人間関係の形成」「6コミュニケーション」)
		場所や場面が変化することにより、心理的に圧迫を受けて適切な行動ができない。	教師と一緒に活動しながら、徐々に慣れるよう指導する。
		特定の場所や状況等において緊張が高まることなどにより、家庭などではほとんど支障なく会話ができるものの、特定の場所や状況では会話ができない。	本人は話したくても話せない状態であることを理解し、本人が安心して参加できる集団構成や活動内容等の工夫をしたり、対話的な学習を進める際には、選択肢の提示や筆談など様々な学習方法を認めたりするなどして、情緒の安定を図りながら、他者とのやりとりができる場面を増やしていく。
		日々の日課と異なる学校行事や、急な予定の変更などに対応することができず、混乱したり、不安になったりして、どのように行動したらよいか分からなくなる。	予定されているスケジュールや予想される事態や状況等を伝えたり、事前に体験できる機会を設定したりするなど、状況を理解して適切に対応したり、行動の仕方を身に付けたりするための指導をする。
		周囲の状況に意識を向けることや経験したことを他の場面にも結び付けて対応することが苦手なため、人前で年齢相応に行動することが難しい。	行動の仕方を短い文章にして読むようにしたり、適切な例を示したりしながら、場に応じた行動の仕方を身に付けさせていく。

<p>(2) 状況の理解と変化への対応に関すること</p>	<p>□場所や場面の状況の理解と心理的抵抗の軽減 □変化する状況の理解と適切な対応方法の習得</p>	<p>見えにくさから周囲の状況を把握することが難しいため、初めての場所や周囲の変化に対して、不安になる。</p>	<p>周囲がどのような状況かを教師が言葉で説明したり、あらかじめその場に移動して一緒に確かめたりすることによって情緒的な安定を図るようにする。その上で、周囲を見回したり、聴覚などの保有する感覚を活用したりして状況を把握することや、周囲の状況やその変化について教師や友達に尋ねて情報を得るようにすることなどを指導する。 (★「3人間関係の形成」「4環境の把握」)</p>
		<p>特定の動作や行動に固執したり、同じ話を繰り返したりするなど、次の活動や場面を切り替えることが難しい。</p>	<p>自分にとって快適な刺激を得ていたり、不安な気持ちを和らげるために自分を落ち着かせようと行動していたりしていることが要因として考えられるため、特定の動作や行動等を無理にやめさせるのではなく、本人が納得して次の活動に移ることができるように段階的に指導する。その際、時間帯や回数をあらかじめ決めたり、自分で予定表を書いて確かめたりして、見通しを持って落ち着いて取り組めるように指導する。 (★「3人間関係の形成」「4環境の把握」)</p>
<p>(3) 障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること</p>	<p>□障がいの状態の理解と受容 □主体的に学習上又は生活上の困難を改善・克服しようとする意欲の向上</p>	<p>友達の病気の進行を見ていることから、将来の自分の病状についても認識している。</p>	<p>卒業後も視野に入れながら学習や運動において打ち込むことができることを見付け、それに取り組むことにより、生きがいを感じることができるよう工夫し、少しでも困難を改善・克服しようとする意欲の向上を図る。</p>
		<p>肢体不自由があるために移動が難しい。</p>	<p>手段を工夫し実際に自分の力で移動ができるようになるなど、障がいに伴う困難を自ら改善し得たという成就感が持てるような指導を行う。</p>
		<p>肢体不自由の状態が重度であり、心理的な安定を図ることが難しい。</p>	<p>寝返りや腕の上げ下げなど、運動・動作をできるだけ自分で制御するような指導を行うことで、自己を確立し、障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲を育てる。</p>
		<p>数字の概念や規則性の理解や、計算することに時間が掛かったり、文章題の理解や推論することが難しかったりすることで、自分の思う結果が得られず、学習への意欲や関心が低い。</p>	<p>自己の特性に応じた方法で学習に取り組むために、周囲の励ましや期待、賞賛を受けながら何が必要かを理解し、「できた」という成功体験の積み重ねを行う。</p>
		<p>障がいに起因して心理的な安定を図ることが困難な状態にある。</p>	<p>同じ障がいのある者同士の自然な関わりを大切にしたり、社会で活躍している先輩の生き方や考え方を参考にできるようにして、心理的な安定を図り、障がいによる困難な状態を改善・克服して積極的に行動しようとする態度を育てる。</p>
		<p>聴覚障がいがあり、人とのコミュニケーションを円滑に行うことができなかつたり、音声のみの指示や発話を理解することができなかつたりするため、学習場面や生活場面において、人と関わることや新しい体験をすることに對して、消極的になってしまう。</p>	<p>自分自身の聞こえにくさによって、人と関わる際にもどのような困難が生じるのかや、新しい体験をする際にどのように行動したり、周囲に働き掛けたりするとかを考えたり、体験したりすることを通して、積極的に問題解決に向かう意欲を育てる。 (★「1健康の保持」「4環境の把握」「6コミュニケーション」)</p>
		<p>吃音があり、学校生活等においてできるだけ言葉少なくすまそうとするなど消極的になる。</p>	<p>教師との安心できる関係の中で、楽しく話す体験を多く持つこと、様々な話し方や読み方を体験したり、自分の得意なことに気付かせて自信を持たせたりすること等を通して、吃音を自分なりに受け止め、積極的に学習等に取り組むようにする。その際、好きなことや得意なことを話題にして自ら話せるようにするとともに、達成感や成功感を味わえるようにする。 (★「1健康の保持」「3人間関係の形成」「6コミュニケーション」)</p>
		<p>コミュニケーションが苦手で、人と関わることに消極的になったり、受身的な態度になったりする。</p>	<p>音声言語が不明瞭だったり、相手の言葉が理解できなかつたりすることに加え、失敗経験から人と関わることに自信が持てなかつたり、周囲の人への依存心が強かつたりすることが要因であると考えられる。まずは、自分の考えや要求が伝わったり、相手の意図を受け止めたりする双方向のコミュニケーションが成立する成功体験を積み重ね、自ら積極的に人と関わろうとする意欲を育てる。 (★「4環境の把握」「6コミュニケーション」)</p>
		<p>文章を読んで学習する時間が増えるにつれ、理解が難しくなり、学習に対する意欲を失い、やがては生活全体に対しても消極的になってしまう。</p>	<p>振り仮名を振る、拡大コピーをするなどによって自分が読みやすくなることを知ることや、コンピュータによる読み上げや電子書籍を利用するなどの代替手段を使うこと等によって読み取りやすくなることを学習する。また、書くことの困難さを改善・克服するためには、口述筆記のアプリケーションやワープロを使ったキーボード入力、タブレット型端末のフリック入力などが使用できることを知り、自分に合った方法を習熟するまで練習する。これらの使用により、学習上の困難を乗り越え、自分の力で学習するとともに、意欲的に活動することができるようにする。また、こうした代替手段等の使用について指導するほか、代替手段等を利用することが周囲に認められるように、周囲の人に依頼することができるように指導を行う。 (★「4環境の把握」「6コミュニケーション」)</p>

区分一覧表 「人間関係の形成」

項目	項目の内容	状態例	具体的指導内容例と留意点
(1) 他者とのかかわりの基礎に関する事	<input type="checkbox"/> 人に対する基本的な信頼感の形成 <input type="checkbox"/> 他者からの働きかけを受け止め、応ずること	人に対する認識が十分に育っておらず、他者からの働き掛けに反応が乏しい。	好む関わりを繰り返し、関わる者の存在に気付かせる。
		他者との関わりを持つようとするが、その方法が十分身に付いていない。	指導担当を決め、安定した関係を形成する。やりとりの方法を大きく変えず繰り返し指導し、相互に関わり合う素地を作ったあと、やりとりの方法を増やす。言葉だけでなく、具体物や視覚的な情報を加える。
		視覚障がいがあり、相手の顔が見えない、あるいは見えにくいために、他者との関わりが消極的、受動的になる。	自分の顔を相手の声が聞こえてくる方向に向けるようにしたり、相手との距離を意識して声の大きさを調整したりするなどのコミュニケーションを図るための基本的な指導を行う。また、その場の状況の変化が分からない場合は、必要に応じて、友達や周りにいる人に問い掛けるなど、積極的に他者と関わろうとする態度や習慣を養うように指導する。(★「2心理的な安定」「6コミュニケーション」)
(2) 他者の意図や感情の理解に関する事	<input type="checkbox"/> 他者の意図や感情の理解 <input type="checkbox"/> 場に応じた適切な行動の形成	言葉や表情、身振りなどを総合的に判断して相手の思いや感情を読み取り、それに応じて行動することが難しい。	生活の様々な場面を想定し、相手の言葉や表情などから、立場や考えを推測するような指導を通して、相手と関わる具体的な方法を身に付けさせる。
		言葉を字義通りに受け止めてしまい、相手の真意を読み取れない。	
		視覚障がいがあり、相手の表情を視覚的に捉えることが困難なため、相手の意図や感情の変化を読み取ることが難しい。	聴覚的な手掛かりである相手の声の抑揚や調子の変化などを的確に聞き分けることができるよう指導する。
		聴覚障がいがあり、聴覚的な情報を入手しにくいことから、視覚的な手掛かりだけで判断したり、会話による情報が円滑でないために自己中心的に捉えたりしやすい。	状況の推移を振り返りながら、出来事の流れについて総合的に判断する経験を積ませる。その際、聴覚活用や読話等の多様なコミュニケーション手段を場面や相手に応じて選択し、的確に会話の内容を把握することができるようにする。(★「2心理的な安定」「4環境の把握」「6コミュニケーション」)
		一人で入院しており、病気や治療の不安を一人で抱え込んだり、家族から離れて過ごすことに孤独を感じたり、逆に親に心配させないように強がったりすることがある。このような自己矛盾を抱える中で、周囲の人へ攻撃的な行動や言葉を表出する。	小集団での話し合い活動や遊び等の取組を通して、不安な気持ちを表現したり、他者に意見を聞いたりして協調性を養うように指導する。(★「2心理的な安定」「6コミュニケーション」)
(3) 自己の理解と行動の調整に関する事	<input type="checkbox"/> 自分の得意なことや不得意なことの理解 <input type="checkbox"/> 自分の行動の特徴の理解 <input type="checkbox"/> 集団の中の状況に応じた行動の形成	失敗経験等の積み重ねにより、自分に自信が持てず、行動することにためらいがちになる。	容易にできる活動を設定し成就感を味わわせ、徐々に自信を回復しながら自己に肯定的な感情を高めさせる。
		経験が乏しく、自分の能力を十分理解できていない。	自分でできること、補助的な手段を活用してできること、他の人に依頼して手伝ってもらうことなどについて、実際の体験を通して理解を促す。
		同じ失敗を繰り返したり、目的に沿って行動を調整することが苦手だったりする。	因果関係を図示して理解させたり、実現可能な目当ての立て方や振り返りの仕方を学んだりして、自ら適切な行動を選択し調整する力を育てていく。
		自己に肯定的な感情を持つことができず、活動が消極的になったり、自暴自棄になったりする。	早期から成就感を味わわせるような活動を設定するとともに、自己を肯定的に捉えられるように指導する。
		自分の長所や短所に関心が向きにくいなど、自己の理解が難しいことや、「他者が自分をどう見ているか」、「どうしてそのような見方をするのか」など、他者の意図や感情の理解が十分でないことから、友達の行動に対して適切に応じることができない。	体験的な活動を通して自分の得意なことや不得意なことの理解を促したり、他者の意図や感情を考え、それへの対応方法を身に付けたりする指導を関連付けて行う。(★「4環境の把握」)
		特定の光や音などにより混乱し、行動の調整が難しくなる。	光や音などの刺激の量を調整したり、避けたりするなど、感覚や認知の特性への対応に関する内容も関連付けて具体的な指導内容を設定する。(★「4環境の把握」)

(4) 集団への参加の基礎に関すること	<input type="checkbox"/> 集団の雰囲気に合わせてること <input type="checkbox"/> 集団に参加するための手順やきまりの理解 <input type="checkbox"/> 遊びや集団活動への積極的な参加	視覚障がいにより、目で見ればすぐに分かるようなゲームのルールが捉えにくく、集団の中に入っていけない。	あらかじめ集団活動に参加するための手順や決まり、必要な情報を得るための質問の仕方を指導して、積極的に参加できるようにする。
		会話の情報を的確に把握できにくいため、ルールや常識の理解、それに基づいた行動が難しい。	会話の背景を想像したり、実際の場面を活用したりして、行動の仕方や相手の受け止め方などについて、具体的なやりとりを通して指導する。
		言葉の意味理解の不足や間違いなどから、友達との会話の背景や経過を類推することが難しく、集団に積極的に参加できない。	日常的によく使われる言い回しや分からないときの尋ね方などを、あらかじめ小集団で指導する。
		遊びの説明を聞き漏らしたり、最後まで聞かずに遊び始めたりするためにルールを十分に理解しないで遊ぶ場合がある。また、勝ちたいという気持ちから、ルールを守ることができない。その結果、うまく遊びに参加することができない。	ルールを少しずつ段階的に理解できるように指導したり、ロールプレイによって適切な行動を具体的に指導したりする。また、遊びへの参加方法が分からないときの不安を静める方法や友達への尋ね方の練習をさせる。 (★「2心理的な安定」「6コミュニケーション」)

区分一覧表 「環境の把握」

項目	項目の内容	状態例	具体的指導内容例と留意点
(1) 保有する感覚の活用に関すること	□保有する感覚（視覚、聴覚、触覚、嗅覚、固有覚、前庭覚など）の十分な活用	弱視である。	保有する視覚を最大限に活用するとともに、その他の感覚も十分に活用して、学習や日常生活に必要な情報を収集するための指導をする。
		聴覚障がいがあり、裸耳では学習や日常生活に必要な情報を収集することが難しい。	補聴器等の装用により、保有する聴力を十分に活用していく。場所や場面に応じて、磁気ループを用いた集団補聴システム、FM電波や赤外線を用いた集団補聴システム又はFM補聴器等の機器の特徴に応じた活用ができるようにする。
		肢体不自由により、運動・動作に伴う筋の収縮・伸張、関節の屈曲・伸展などに制限や偏りがあり、自分自身の体位や動きを把握し、調整することが難しい。	自分自身の体位や動きについて、視覚的なイメージを提示したり、分かりやすい言葉で伝えたりして、自分の身体を正しく調整することができる力を身に付けさせる。
		障がいが重度で重複しているため、周囲の情報を得たり、自分自身の身体の動きを調整したりすることが難しい。	視覚、聴覚、触覚と併せて、姿勢の変化や筋、関節の動きなどを感じ取る固有覚や前庭覚を活用できるようにすることを考慮する。その際、それらを個々の感覚ごとに捉えるだけでなく、相互に関連付けて捉えることができるようにする。
		視覚や聴覚への働き掛けに対して明確な応答が見られない。	教師が抱えて揺らすなどして、触覚や揺れの感覚への働き掛けに加えて、玩具を見せたり言葉掛けをしたりするなどして視覚や聴覚の活用を促す。適度な揺さぶりの中で視覚や聴覚に対する働き掛けも心地よく受け止められるようになったら、目の前に音の出る玩具などを示し、音を聞きながら目で玩具を追ったり、音の方に顔を向けて玩具を見つめたりできるように働き掛けを発展させていくなど、細かなステップを追って、視覚と聴覚を協調させたり、視覚と手の運動を協調させたりする指導を行う。 (★「5身体の動き」「6コミュニケーション」)
(2) 感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること	□自分に入ってくる情報の適切な処理 □自己の感覚の過敏さや認知の偏りなどの特性理解と、適切な対応	視覚障がいがあり、障がいの特性により屋外だけでなく屋内においても蛍光灯などにまぶしさを強く感じる。	遮光眼鏡を装用するよう指導するとともに、その習慣化を図る。また、室内における見えやすい明るさを必要に応じて他者に伝えたり、カーテンで明るさを調整したりできるように指導する。
		聴覚の過敏さのため特定の音に、また、触覚の過敏さのため身体接触や衣服の材質に強く不快感を抱く。それらの刺激が強すぎたり、突然であったりすると、感情が急激に変化したり、思考が混乱したりする。	不快である音や触感などを自ら避けたり、状態に応じて音が発生する理由や身体接触の意図を知らせるなどして、それらに少しずつ慣れていったりするよう指導する。
		不足する感覚を補うため、身体を前後に動かしたり、身体の一部をたたき続けたりして、自己刺激を過剰に得ようとする。	自己刺激のための活動と同じような感覚が得られる他の適切な活動に置き換えるなどして、興味が広がるような指導をする。
		注意機能の特性により、注目すべき箇所が分からない、注意持続時間が短い、注目する対象が変動しやすいなどから、学習等に支障をきたす。	注目すべき箇所を色分けしたり、手で触れるなど他の感覚も使ったりすることで注目しやすくしながら、注意を持続させることができることを実感し、自分に合った注意集中の方法を積極的に使用できるようにする。
		言葉や数の学習で困難を示し、認知面において不得意なことがある一方で得意な方法を持っている。	一人一人の認知の特性に応じた指導方法を工夫し、不得意なことを少しずつ改善できるよう指導するとともに、得意な方法を積極的に活用するよう指導する。
		脳性まひがあり、文字や図形を正しく捉えることが難しい。	一つの文字や図形だけを取り出して輪郭を協調して見やすくしたり、文字の部首や図形の特徴を話し言葉で説明したりする。また、学習活動を通じて、自分の得意な学習のスタイルを知り、自ら使えるように指導する。
		上肢にまひがあり、文字や図形を書くことが難しい。	コンピュータ等を活用して書くことを補助することによって、学習を効果的に進めるようにする。
体の動かし方にぎこちなさがあり、リコーダーを吹くなどの指先を細かく動かす活動や水泳などの全身を協調して動かす運動を苦手としている。	固有覚や前庭覚の発達の段階等を把握した上で、現在できている動作がより確実にできるよう取り組むとともに、指や身体を、一つ一つ確かめながらゆっくり動かすようにするなど、発達の段階に見合った運動から行うようにする。また、「できた」という経験と自信を持てるようにし、自己を肯定的に捉えることができるようにする。 (★「2心理的な安定」「3人間関係の形成」「5身体の動き」)		

<p>(3) 感覚の補助及び代行手段の活用に関すること</p>	<p><input type="checkbox"/>保有する感覚を用いて状況を把握しやすくするために各種の補助機器の活用 <input type="checkbox"/>他の感覚や機器での代行</p>	<p>視覚障がいがあり、小さな文字など細かな物や遠くの物を読み取ることが難しい。</p>	<p>遠用・近用などの各種の弱視レンズや拡大読書器などの視覚補助具、タブレット型端末などを効果的に活用できるように指導する。また、明るさの変化を音の変化に変える感光器のように、視覚以外の感覚で確認できる機器を必要に応じて活用できるように指導する。</p>
		<p>聴覚障がいがあり、補聴器や人工内耳を装着している。</p>	<p>補聴器等を装着していても、音や他者の話を完全に聞き取れるわけではないため、聴覚活用に加えて、視覚を通じた情報収集（手話や指文字、キュード・スピーチ、口形、談話など）の特徴や機能を理解して活用できるようにする。</p>
		<p>聴覚に過敏さが見られ、子どもの泣き声など、特定の音を嫌がる。</p>	<p>自分で苦手な音などを知り、音源を遠ざけたり、イヤーマフやノイズキャンセルヘッドホン等の音量を調節する器具を利用したりするなど、自分で対処できる方法を身に付けさせる。また、その特定の音が発生する理由や仕組みなどを理解し、徐々に受け入れられるように指導していく。</p>
		<p>聴覚に過敏さが見られ、必要な音を聞き分けようとしても、周囲の音が重なり聞き分けづらい。</p>	<p>音量を調節する器具の利用等により、聞き取りやすさが向上し、物事に集中しやすくなることを学べるようにし、必要に応じて使い分けられるようにする。状況に応じてこれらの器具を使用することを周囲に伝えることができるように指導する。</p>
		<p>弱視のため、遠くの文字が見えにくかったり、本などを読むのに時間が掛かったりするが、思春期になると、周囲の人から見られることを気にして弱視レンズの使用をためらうことがある。</p>	<p>低学年から各種の弱視レンズなどを使ってよく見える体験を繰り返すとともに、障がいへの理解を図り、障がいによる困難な状態を改善・克服する意欲を喚起する指導を行う。（★「2心理的な安定」「5身体の動き」）</p>
<p>(4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること</p>	<p><input type="checkbox"/>いろいろな感覚器官やその補助及び代行手段の総合的な活用 <input type="checkbox"/>情報収集や環境状況の把握による、的確な判断や行動の形成</p>	<p>視覚障がいがあり、他の感覚器官から情報を得て、活動している。</p>	<p>様々な感覚を通して得られる情報を総合的に活用して周囲の状況を把握し、それに基づいて自分のいる場所や進むべき方向などを的確に判断し行動できるよう指導する。中学生・高校生の場合は、必要に応じて、携帯電話のナビゲーション機能などを利用して自分の位置と周囲の状況を把握させる。</p>
		<p>聴覚障がいがあり、補聴器等を通して得られた情報だけでは、周囲の状況やその変化を十分に把握することが難しい。</p>	<p>身の回りの音を聞き取り、様子や言葉を理解する場合には、視覚や嗅覚などの感覚も総合的に活用する指導が必要である。その際には、情報を的確に収集するとともに、様々な感覚をいかに活用するかについても考えさせる。</p>
		<p>自分の身体に対する意識や概念が十分に育っていないため、物や人にぶつかったり、簡単な動作をまねることが難しかったりする。</p>	<p>粗大運動や微細運動を通して、全身及び身体の各部位を意識して動かしたり、身体の各部位の名称やその位置などを言葉で理解したりするなど、自分の身体に対する意識を高めながら、自分の身体が基点となって位置、方向、遠近の概念の形成につなげられるように指導する。</p>
		<p>視知覚のみによって文字を認識してから書こうとすると、目と手の協応動作が難しく、意図している文字がうまく書けない。</p>	<p>腕を大きく動かして文字の形をなぞるなど、様々な感覚を使って多面的に文字を認識し、自らの動きを具体的に想像してから文字を書くことができるような指導をする。</p>
		<p>聴覚障がいがあることにより、背後や外の様子等、周囲の状況を的確に把握できにくいことや、周囲の人とのコミュニケーションの不十分さなどの影響で、物事がどのように推移してきたか、相手がどう思っているか、これから何が始まるかなどについて、予想できにくい。</p>	<p>視覚や嗅覚等の様々な感覚を活用して情報を収集したり、多様な手段を活用した積極的なコミュニケーションを通して相手を理解したりするとともに、それまでに得ている情報等と照らし合わせたりしながら、周囲の状況や人の気持ち、今後の展開等を推察できるようにする。（★「3人間関係の形成」「6コミュニケーション」）</p>
		<p>動く対象物に手を伸ばしてそれをつかむなどといった、目と手を協応させた活動が難しい。</p>	<p>頭部を安定させるための補助具を活用したり、前腕で上体を支えやすくする姿勢の保持を工夫したりするなどして、目の前に置かれた興味のある玩具を注視したり、ゆっくり動く教材などを追視したりする力を高めていく。また、見ていた対象物に手を伸ばして、倒したり転がしたりする中で、物を操作する経験を重ね、目で手の動きを追うような力を付けるように指導する。（★「5身体の動き」）</p>

<p>(5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること</p> <p>□物の機能や属性、形、色、音が変化する様子、空間・時間等の概念の形成 □獲得した概念を認知や行動の手掛かりとした活用</p>	<p>視覚障がいがあり、事物・事象の全体像を捉え、必要な情報を抽出して、的確な概念を形成することが難しい。</p>	<p>触覚や保有する視覚などを用い、対象物の形や大きさ、手触り、構造、機能等を観察することで、的確な概念を形成できるようにする。それらの概念を日常の学習や生活における認知や行動の手掛かりとして活用できるように指導する。</p>
	<p>肢体不自由があり、身体の動きの制限により、上下、前後、左右、遠近等の概念の形成が十分に図られず、空間における自分と対象の位置関係を理解することが難しい。</p>	<p>自分の身体の各部位を確認するような活動を通して、自分の身体に対する意識を明確にするとともに、行動の基準を言葉で確認しながら、空間概念の形成を図る。</p>
	<p>「もう少し」、「そのくらい」、「大丈夫」など、意味内容に幅のある抽象的な表現を理解することが困難な場合があるため、指示の内容を具体的に理解することが難しい。</p>	<p>指示の内容や作業手順、時間の経過等を視覚的に把握できるように教材・教具等の工夫を行うとともに、手順表などを活用しながら、順序や時間、量の概念等を形成できるようにする。</p>
	<p>特性により、興味のある事柄に注意が集中する傾向があるため、結果的に活動等の全体像が把握できない。</p>	<p>一部分だけでなく、全体を把握することが可能となるように、順序に従って全体を把握する方法を練習させる。</p>
	<p>活動に過度に集中してしまい、終了時刻になっても活動を終わることができない。</p>	<p>活動の流れや時間を視覚的に捉えられるようなスケジュールや時計などを示し、時間によって活動時間が区切られていることを理解できるようにしたり、残り時間を確認しながら活動の一覧表に優先順位をつけたりするなどして、適切に段取りを整えられるようにする。</p>
	<p>左右の概念を理解することが困難なため、左右の概念を含んだ指示や説明を理解することがうまくできず、学習を進めていくことが難しい。</p>	<p>様々な場面で、見たり触ったりする体験的な活動と「左」や「右」という位置や方向を示す言葉とを関連付けながら指導して、基礎的な概念の形成を図る。</p>
	<p>弱視のため、見ようとするものに極端に目を近付けたり、見える範囲が限られる場合があったりするために、全体像が捉えにくく、地図やグラフなどに示されている情報の中から必要な情報を抽出することが難しい。</p>	<p> unnecessary情報を削除したり、コントラストを高めたりして認知しやすい教材を提供するとともに、これまで学習してきた知識やイメージを視覚認知に生かすなどの指導を行う。</p>
	<p>聴覚障がいがある。</p>	<p>視覚的な情報を適切に活用して作業等を行う。例えば、折り紙をする場合で、教師や友達の折り方を見て、同じように紙を折るような活動の際には、それぞれの作業過程を的確な言葉に結び付けていく。「端をびったり重ねる」「角が重なるように折る」「左手で押さえて、右手で折り目を付ける」「片方を開く」などの言葉を知り、実際に作業できるようにする。このような言葉と行動の対応関係を生活の様々な機会を通じて繰り返していくことで、その概念を的確に身に付け、さらに、習得した概念を用いて、より複雑な事柄の認知や作業に取り組むことができるようにする。 (★「6コミュニケーション」)</p>
<p>上肢操作が難しく、見えにくさがあったりすることから、物の機能や属性等基本的な概念の形成を図ることが難しい。</p>	<p>手掛かりとしやすい情報の提示方法等を明らかにして、多くの物に関わらせ、それぞれの物の特徴を把握させる。初めて関わる物については、物の特徴を教師が言語化して伝えることで、予測する力を育てることができる。 (★「5身体の動き」「6コミュニケーション」)</p>	

区分一覧表 「身体の動き」

項目	項目の内容	状態例	具体的指導内容例と留意点
(1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること	<input type="checkbox"/> 日常生活に必要な動作の基本となる姿勢保持 <input type="checkbox"/> 上肢・下肢の運動・動作の改善及び習得 <input type="checkbox"/> 関節の拘縮や変形の予防 <input type="checkbox"/> 筋力の維持・強化	肢体不自由があり、基本動作が未習得であったり、間違っして身に付けてしまったりしているために、生活動作や作業動作を十分に行うことができない。	全身又は身体各部位の筋緊張が強すぎる場合、その緊張を弛めたり、弱すぎる場合には、適度な緊張状態をつくりだしたりするなど、個々の運動・動作の状態に即した指導を行う。
		身体の部位を適切に動かしたり、指示を聞いて姿勢を変えたりすることが難しい。	より基本的な動きの指導から始め、徐々に複雑な動きを指導する。そして、次第に、目的の動きに近づけていくことにより、必要な運動・動作が確実に身に付くよう指導する。
		視覚障がいがあり、身体の動き等を模倣することを通して基本的な運動・動作を習得することが難しい。	姿勢や身体の動きについて、教師の身体や模型などに直接触らせて確認させた後、自分の身体を実際に使って、その姿勢や動きを繰り返し学習させるとともに、その都度教師が、口頭で説明したり、手を添えたりするなどして、正しい姿勢の保持や運動・動作を習得できるよう指導する。
		身体を常に動かしている傾向があり、自分でも気付かない間に座位や立位が大きく崩れ、活動を継続できなくなってしまう。	身体を動かすことに関する指導だけでなく、姿勢を整えやすいような机や椅子を使用することや、姿勢保持のチェックポイントを自分で確認できるような指導を行う。 (★「2心理的な安定」「4環境の把握」)
(2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関すること	<input type="checkbox"/> 様々な補助用具等の補助的手段の活用	日常生活動作や作業動作の遂行を補うため、補助用具を必要とする。	目的や用途に応じて適切な用具を選び、十分使いこなせるように指導する。また、発達の段階を考慮しながら、補助用具のセッティングや収納の仕方を身に付けたり、自分に合うように補助用具を調整したりすることを指導する。
		車椅子の使用が度重なることにより、立位を保持する能力が低下する。	補助用具の使用の仕方を工夫し、身体の動きの維持や習得を妨げないように十分留意する。
		座位を保持することが難しい。	座位をとることが可能ならば、骨盤を安定させるための装置や体幹を支えるためのベルトなどが付いた椅子を活用する。併せて、自分で頭を上げたり身体を起こした状態を維持するためには、積極的に見ようとしたり触ろうとしたりすることが必要である。そのため、子どもが視覚や触覚を積極的に活用するよう教材・教具や環境の設定を工夫する。 (★「4環境の把握」)
(3) 日常生活に必要な基本動作に関すること	<input type="checkbox"/> 身辺処理動作の習得 <input type="checkbox"/> 書字、描写等の学習のための動作の習得	上肢を十分に動かすことができない。	安定した座位を確保しながら、両腕を体の前へ伸ばす、身体の正面で両手を合わせる、指を握ったり開いたりする、手の動きを目で追う等の指導をする。
		運動・動作が極めて困難であり、日常生活に必要な基本動作のほとんどで援助を受けている。	援助を受けやすい姿勢や手足の動かし方を身に付けることを目標として、指導を行う。
		衣服の着脱におけるボタンの着脱やはさみなどの道具の操作などが難しい。	興味や関心が持てる内容や課題を工夫し、使いやすい適切な道具や素材に配慮する。その上で、課題の難易度を考慮しながら、例えば、衣服の着脱では、ボタンはめの前にボタン外しから取り組むことや、ボタンや穴の大きさを徐々に小さくすること、はさみを使用する際には、切る長さを徐々に長くしたり、直線から曲線など切る形を変えたりするなど、日常生活に必要な基本動作をスモールステップで指導していく。 (★「4環境の把握」)
		鉛筆の握り方がぎこちなく過度に力が入りすぎてしまうこと、筆圧が強すぎて行や枠からはみ出てしまうこと等、手や指先を用いる細かい動きのコントロールが苦手である。さらに、うまく取り組めないことにより焦りや不安が生じて、余計に書字が乱れてしまう。	本人の使いやすい形や重さの筆記用具や滑り止め付き定規等を用いることにより、安心して取り組めるようにした上で指導する。また、自分の苦手な部分を申し出て、コンピュータによるキーボード入力等で記録することや黒板を写真に撮ること等、ICT機器を用いて書字の代替を行えるように指導する。 (★「2心理的な安定」「4環境の把握」)
(4) 身体の移動能力に関すること	<input type="checkbox"/> 自力での身体移動や歩行 <input type="checkbox"/> 歩行器や車椅子による移動	視覚障がいがある。	発達の段階に応じて、伝い歩きやガイド歩行、基本的な白杖の操作技術、他者に援助を依頼する方法などを身に付けて安全に目的地まで行けるように指導する。白杖を用いた歩行の際には、保有する視覚を十分に活用したり、視覚補助具を適切に使ったりできる力を付けさせる。

(4) 身体の移動能力に関すること	<input type="checkbox"/> 自力での身体移動や歩行 <input type="checkbox"/> 歩行器や車椅子による移動	筋力が弱く、歩行に必要な緊張が得られない。	歩行器を用いた歩行を目標に掲げるなど、日常生活に役立つ移動能力を習得するよう指導する。
		歩行が難しい。	車椅子による移動を目標に掲げるなど、日常生活に役立つ移動能力を習得するよう指導する。
		心臓疾患があり、心臓への負担が掛かることから歩行による移動が制限され、必要に応じて歩行器や電動車椅子等の補助的手段を活用している。	医師の指導を踏まえ、病気の状態や移動距離、活動内容によって適切な移動手段を選択し、心臓に過度の負担を掛けることなく移動の範囲が維持できるよう指導する。
		寝返りや腹這いが難しい。	寝返りや腹這いによる移動だけでなく、それらも含めた基本動作すべての改善及び習得を目指す。姿勢保持や上下肢の基本動作などの指導経過を踏まえて適した移動の方法を選択し、指導する。
		学校外での移動や、交通機関の利用の際に、一人での移動が難しい。	左記のような社会的な場面における移動能力を総合的に把握し、実際の場面で有効に生かされるよう指導する。例えば、駅など危険が予想される場所を歩く場合に、ためらわずに駅員や周囲の人に援助を依頼することなど、安全が確保できる方法を十分に理解させ、身に付けさせておく。
		車椅子を利用して、一人で外出することがある。	車椅子の操作に慣れるとともに、目的地まで車椅子を操作し続けるための体力を付けさせる。それに加えて、目的地までの距離や段差の状況などを調べ、自分の車椅子を操作する力を考慮して一人で行けるかどうかを判断し、一人で行くことが難しい場合には、援助者を探して依頼することが必要となる。また、途中で通行人に道を尋ねたり、路上にある障害物を取り除いてもらったりすることも考えられる。そのため、周囲にいる人に質問したり、依頼したりするコミュニケーションについても指導する。 (★「4環境の把握」「6コミュニケーション」)
(5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること	<input type="checkbox"/> 作業に必要な基本動作の習得 <input type="checkbox"/> 巧緻性や持続性の向上 <input type="checkbox"/> 作業を円滑に遂行する能力の向上	左右を協調させた上肢操作のぎこちなさのため、ひもをつまんだり、交差させたりしてひもを結ぶことが難しい。	指の曲げ伸ばしをしたり、指を対向させたりするような物を介さない基本的な動きを取り入れるとともに、必要に応じて片方のひもを押さえておく補助具の活用を促す。
		目と手の協応動作や指先の細かい動き、体を思った通りに動かすこと等がうまくいかないことから、身の回りの片付けや整理整頓等を最後まで遂行することが苦手である。	身体をリラックスさせる運動やボディイメージを育てる運動に取り組みながら、身の回りの生活動作に習熟できるようにする。
		手足を協調させて動かすことや微細な運動をすることに難しさがある。	目的に即して意図的に身体を動かすことを指導したり、手足の簡単な動きから始めて段階的に高度な動きを指導したりする。手指の巧緻性を高めるためには、興味や関心を持っていることを生かしながら、道具等を使って手指を動かす体験の積み重ねを行う。
		自分のやり方にこだわりがあったり、手足を協調させてスムーズに動かしたりすることが難しい。さらに、他者の意図を適切に理解することが難しかったり、興味のある一つの情報のみに注意が集中してしまったりすることから、教師が示す手本を自ら模倣しようとする意識が持てない。	一つの作業について、いろいろな方法を経験させるなどして、作業のやり方へのこだわりを和らげたり、教師との良好な人間関係を形成し、主体的に指導者の示す手本を模倣しようとする気持ちを育てたりする。 (★「2心理的な安定」「3人間関係の形成」)
		粗大な運動・動作には問題は見られないものの、細かい手先を使った作業の遂行が難しかったり、その持続が難しかったりする。	手遊びやビーズなどを仕分ける活動、ひもにビーズを通す活動など、両手や目と手の協応動作などができるように指導する。その際、単に訓練的な活動とならないよう、興味や関心の持てる内容や課題を工夫し、楽しんで取り組めるようにしたり、物を作ることを通して、他者から認められ、達成感が得られるようにしたりするなど、意欲的に取り組めるようにする。(★「4環境の把握」)

区分一覧表 「コミュニケーション」

項目	項目の内容	状態例	具体的指導内容例と留意点
(1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること	□表情や身振り、各種の機器を用いた意思のやりとり	障がいや重度で重複している。	話し言葉によるコミュニケーションにこだわらず、本人にとって可能な手段を講じて、より円滑なコミュニケーションを図る。周囲の者は、表情や身振り、しぐさなどを細かく観察することにより、その意図を理解する。双方向のコミュニケーションが成立することを旨として、それに必要な基礎的能力を育てる。
		聴覚障がいがあるため、相手の表情を見たり、身振りを交えて伝えたりする。	相手を注視する態度や構えを身に付けたり、あるいは自然な身振りで表現したり声を出したりして、相手と関わることができるようにしたりするなど、コミュニケーションを行うための基礎的能力を身に付けさせる。
		興味のある物を手にしたいという欲求が勝り、所有者のことを確認しないまま、他者の物を使ったり、他者が使っている物を無理に手に入れようとする。	左記の行動が意思の表出や要求を伝達しようとした行為であることを理解するとともに、より望ましい方法で意思や要求を伝えることができるよう指導する。
		他の人の手を取って、その人に自分が欲しい物を取ってもらおうとする。	
		語彙が少ないため自分の考えや気持ちを的確に言葉にできないことや相手の質問に的確に答えられない。	興味・関心に応じた教材を活用し、語彙を増やしたり、言葉のやりとりを楽しませる。
		自分の気持ちや要求を適切に相手に伝えられなかったり、相手の意図が理解できなかったりしてコミュニケーションが成立しにくい。	自分の気持ちを表した絵カードを使ったり、簡単なジェスチャーを交えたりするなど、要求を伝える手段を広げるとともに、人とのやりとりや人と協力して遂行するゲームなどをしたりするなど、認知発達や社会性の育成を促す学習などを通して、自分の意図を伝えたり、相手の意図を理解したりして適切な関わりができるように指導する。
		発声や身体の動きによって気持ちや要求を表すことができるが、発声や指差し、身振りやしぐさなどをコミュニケーション手段として適切に活用できない。	欲しい物を要求する場面などで、ふさわしい身振りなどを指導したり、発声を要求の表現となるよう意味付けたりするなど、様々な行動をコミュニケーション手段として活用できるように指導する。(★「3人間関係の形成」「5身体の動き」)
他の人への関心が乏しく、結果として他の人からの働き掛けを受け入れることが難しい。	興味や関心のある活動の中で、教師の言葉掛けに対して視線を合わせたり、楽しんでいる場面に教師が「楽しいね」、「うれしいね」などの言葉を掛けたりするなどして、人とやりとりをすることや通じ合う楽しさを感じさせながら、他者との相互的なやりとりの基礎的能力を高める指導をする。また、コミュニケーション手段として身振り、絵カードやメモ、機器などを活用する際には、個々の実態を踏まえ、無理なく活用できるように工夫する。(★「3人間関係の形成」「5身体の動き」)		
(2) 言語の受容と表出に関すること	□話し言葉や各種の文字・記号等を用いた言語の受容・表出	脳性まひで、言語障がいや、意思の表出が難しい。内言語や言葉の理解には困難がないが、話し言葉が不明瞭であったり短い言葉を伝えるのに相応な時間が掛かったりする。	発語機能の改善を図るとともに、文字の使用や補助的手段の活用を検討して意思の表出を促す。
		聴覚障がいのため、相手へ自分の意図を適切に伝えることが難しい。	音声だけでなく身振りを状況に応じて活用し、さらに、手話・指文字や文字等を活用して、主体的に自分の意思を表出できるような機会を設ける。
		発声・発語器官（口腔器官）の微細な動きやそれを調整することが難しかったり、音韻意識の未熟さがあつたりするため、正しい発音にならないことがある。	構音運動を調整する力を高めたり、音韻意識を育て、音の弁別や自分の発音をフィードバックできるようにしたりして、正しい発音を定着させる。

<p>(2) 言語の受容と表出に関すること</p>	<p><input type="checkbox"/>話し言葉や各種の文字・記号等を用いた言語の受容・表出</p>	<p>他者の意図を理解したり、自分の考えを相手に正しく伝えたりすることが難しい。</p>	<p>話す人を見たり、話を聞く態度を形成したりするなど、人との関わりやコミュニケーションの基礎に関する指導を行う。その上で、正確に他者とやりとりをするために、絵や写真などの視覚的な手掛かりを活用しながら相手の話を聞くことや、メモ帳やタブレット端末等を活用して自分の話したいことを相手に伝えることなど、本人の障がいの状態等に合わせてコミュニケーション手段を用いることができるようにする。また、相手の言葉や表情などから相手の意図を推測するような学習を通して、周囲の状況や他者の感情に配慮した伝え方ができるようにする。 (★「2心理的な安定」「3人間関係の形成」)</p>
<p>(3) 言語の形成と活用に関すること</p>	<p><input type="checkbox"/>事象や現象、自己の行動等に対応した言語の概念の形成 <input type="checkbox"/>体系的な言語の習得</p>	<p>話し言葉を用いることができず、限られた音声しか出せない。</p>	<p>掛け声や擬音・擬声語等を遊びや学習、生活の中に取り入れて、自発的な発声・発語を促すようにする。また、ときには、物語や絵本を身振りなどを交えて読み聞かせる。</p>
<p>聴覚障がいのため、体験したことと日本語とを結び付けることが難しい。</p>	<p>体験した出来事を文章（5W1H）で表現するときに、まず手話で体験した出来事を表現させ、その内容を日本語に置き換えながら文章を書くなど、手話を活用した日本語の指導をする。</p>		
<p>聴覚障がいがあり、「何を書くか（内容）」と「どのように書くか（日本語表現）」の両方を考える負担が掛かり、なかなか文章を書き進めることができない。</p>	<p>手話を活用することにより「何を書くか」を決めさせた後、「どのように書くか」に専念して書かせる。また、写真や絵などを見て分かったことや考えたことを学級で話し合い、それを文章で表現させる。</p>		
<p>語彙が少ないため自分の考えや気持ちを的確に言葉にできないことや相手の質問に的確に答えられない。</p>	<p>興味・関心に応じた教材を活用し、語彙を増やしたり、言葉のやりとりを楽しんだりさせる。</p>		
<p>視覚を活用した学習が困難なため、一面的な理解で、事物、事象や動作と言葉が結び付かない。</p>	<p>実際に体験ができるような教材・教具を工夫したり、触覚や聴覚、あるいは保有する視覚を適切に活用したりして、言葉の意味を正しく理解し、活用できるように指導する。</p>		
<p>言葉は知っているものの、その意味を十分に理解せずに活用したり、意味を十分に理解していないことから活用できなかつたりするため、思いや考えを正確に伝える語彙が少ない。</p>	<p>実体験、写真や絵と言葉の意味を結び付けながら理解することや、ICT機器等を活用し、見る力や聞く力を活用しながら言語の概念を形成するように指導する。</p>		
<p>言語発達に遅れがあり、コミュニケーションを円滑に行うことが難しい。</p>	<p>教師との安心できる場で言葉遊びを行ったり、作業や体験的な活動を取り入れたりする。また、語彙の習得や上位概念、属性、関連語等の言語概念の形成には、生活経験を通して、様々な事物を関連付けながら言語化を行う。そのために、課題の設定を工夫して「できた」という経験を重ね自信を持たせ、コミュニケーションに対する意欲を高め、生活の中で生かせるように言葉での表現を引き出していく。 (★「2心理的な安定」「3人間関係の形成」)</p>		
<p>(4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること</p>	<p><input type="checkbox"/>話し言葉や各種の文字・記号、機器等のコミュニケーション手段の適切な選択・活用 <input type="checkbox"/>円滑なコミュニケーション</p>	<p>音声言語の表出は困難であるが、文字言語の理解ができる。</p>	<p>筆談で相手に自分の意思を伝えたり、文字板、ボタンを押すと音声が出る機器、コンピュータ等を使って、自分の意思を表出したりすることができるように指導する。</p>
<p>音声言語による表出が難しく、上肢の運動・動作にも困難が見られる。</p>	<p>下肢や舌、顎の先端等でボタンを押すと音声が出る機器やコンピュータ等を操作できるように工夫する。</p>		
<p>視覚障がいにより点字を常用して学習する。</p>	<p>キーボードでの入力や点字ディスプレイへの出力に慣れ、点字と普通の文字を相互変換したり、コンピュータの読み上げ機能を使って文書処理をしたりするなど、コンピュータを操作する技能の習得を図る。さらには、点字携帯情報端末を、学習や生活の様々な場面で活用するよう指導する。</p>		
<p>弱視があるため、コンピュータの拡大機能を使用している。</p>	<p>自分にとって学習効率の良い文字サイズを知り、拡大文字の資料を必要とする場合などに、コンピュータの拡大機能などを使って、文字サイズ、行間、コントラスト等を調整し読みやすい資料を作成できるように指導する。</p>		

<p>(4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること</p>	<p>□話し言葉や各種の文字・記号、機器等のコミュニケーション手段の適切な選択・活用 □円滑なコミュニケーション</p>	<p>進行性の眼疾患等で普通の文字を使用した学習が難しい。</p>	<p>適切な時期に使用文字を点字に切り替える等、学習効率を考えた文字選択の配慮を行う。</p>
		<p>聴覚障がいがあり、手話や指文字を使用している。</p>	<p>音声や手話、指文字、キュード・スピーチ等を使用して、周囲とのより円滑なコミュニケーションを図る。その際、様々な体験を通して、相手に伝わりやすい手段や伝え方を考える機会を設ける。</p>
		<p>視覚と聴覚の両方に障がいがあるため、コミュニケーションが難しい。</p>	<p>保有する視覚と聴覚の活用、触覚を活用したコミュニケーション手段が考えられる。触覚を活用したコミュニケーション手段として、身振りサインに触ること、手話や指文字に触れて読み取る触手話・触指文字、指文字等があるが、障がいの状態や発達段階等を考慮して、適切なコミュニケーション手段の選択・活用に努める。</p>
		<p>対人関係における緊張や記憶の保持などの困難さを有し、適切に意思を伝えることが難しい。</p>	<p>タブレット型端末に入れた写真や手順表などの情報を手掛かりとすることや、音声出力や文字・写真など、代替手段を選択し活用したコミュニケーションができるようにしていく。</p>
		<p>肢体不自由があり、上肢操作の制限から、文字を書いたりキーボードで入力したりすることが難しい。</p>	<p>画面を一定時間見るために頭部を保持しながら、文字盤の中から自分が伝えたい文字を見ることで入力のできるコンピュータ等の情報機器を活用し、他者に伝える成功体験の積み重ねを行う。</p>
		<p>進行性の病気の症状が進行して言葉による表出が難しい。</p>	<p>今後の進行状況を見極め、今までできていたことができなくなることによる自己肯定感（自己を肯定的に捉える感情）の低下への心のケアに留意するとともに、コミュニケーション手段を本人と一緒に考え、自己選択・自己決定の機会を確保しながらコミュニケーション手段を活用する力を獲得していけるよう指導する。</p>
		<p>言葉でのコミュニケーションが難しい。</p>	<p>自分の意思を適切に表し、相手に基本的な要求を伝えられるように身振りなどを身に付けさせたり、話し言葉を補うために絵カードやメモ、タブレット端末等の機器等を活用できるようにしたりする。</p>
		<p>順を追って説明することが困難であるため、聞き手に分かりやすい表現をすることができない。</p>	<p>簡単な絵に吹き出しや簡単なせりふを書き加えたり、コミュニケーションボード上から、伝えたい項目を選択したりするなどの手段を練習しておき、必要に応じてそれらの方法の中から適切な物を選んで使用することができるように指導する。</p>
		<p>読み書きの困難により、文章の理解や表現に非常に時間が掛かる。</p>	<p>コンピュータの読み上げ機能を利用したり、関係性と項目を図やシンボルなどで示すマインドマップのような表現を利用したりすることで、コミュニケーションすることに楽しさと充実感を味わえるようにしていく。</p>
		<p>聴覚障がいがあり、相手や状況に応じたコミュニケーション手段の適切な選択・活用が難しい。</p>	<p>補聴器や人工内耳、読話やキュード・スピーチ、指文字、手話、筆談（文字や絵）、コンピュータ等情報機器等の選択・活用に当たって、聴覚障がいの状態や発達の段階、進路希望等の本人の意思、保護者の考え等を動かし、本人の持っている可能性を最大限に生かして、将来の自立や積極的な社会参加を目指す指導内容・方法を工夫する。その際、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲や自信の喚起、周囲に対する関心や人間関係の拡大等に留意するとともに、主体的に状況を判断し、適切にコミュニケーション手段を組み合わせたリ、変更したりすること等ができるようにしていく。 (★「1健康の保持」「2心理的な安定」「3人間関係の形成」「4環境の把握」)</p>
<p>(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること</p>	<p>□場や状況に応じた、主体的なコミュニケーションの展開</p>	<p>視覚障がいがあり、視覚的な情報の入手に困難があり、場に応じた話題の選択や、部屋の広さや状況に応じた声の大きさの調節、話し方などに課題がある。</p>	<p>相手の声の様子や握手をした際の手の位置から、相手の体格や年齢などを推測して話を進めたり、声の響き方から、部屋の広さや相手との距離を判断して声の出し方を調節したりするなど、場や状況に応じた話し方を身に付ける指導を行う。</p>
		<p>話の内容を記憶して前後関係を比較したり類推したりすることが困難なため、会話の内容や状況に応じた受け答えをすることができない。</p>	<p>自分で内容をまとめながら聞く能力を高めるとともに、分からないときに聞き返す方法や相手の表情にも注目する態度を身に付けるなどして、そのときの状況に応じたコミュニケーションができるようにする。</p>
		<p>会話の内容や周囲の状況を読みとることが難しいため、状況にそぐわない受け答えをする。</p>	<p>相手の立場に合わせた言葉遣いや場に応じた声の大きさなど、場面にふさわしい表現方法を身に付けさせる。なお、その際には、実際の生活場面で、状況に応じたコミュニケーションを学ぶことができるような指導を行う。</p>
		<p>家庭などの生活の場では普通の会話ができるものの、学校の友達とは話すことができないなど選択性かん黙がある。</p>	<p>気持ちが安定し、安心できる状況づくりや信頼できる人間関係づくりが重要であり、その上で、興味・関心のある事柄について、共感しながら一緒に活動したり、日記や作文などを通して気持ちや意思を交換したりする機会を多くする。また、話すことにこだわらず、状況に応じて、筆談などの話し言葉以外のコミュニケーション手段を活用する。その際、自信が持て、自己に対して肯定的なイメージを保つことができるような指導を行う。(★「2心理的な安定」「3人間関係の形成」)</p>

<p>(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること</p>	<p>□場や状況に応じた、主体的なコミュニケーションの展開</p>	<p>入院中の不安の原因が分からなかったり、気持ちを言語化することができなかつたりして、もやもやとした気持ちの状態が続いている。また、不安を表出することができないことによるイライラとした気持ちが、周囲の友達や看護師、教師等への暴言などの攻撃的な行動につながる。</p>	<p>先に入院していた子どもの体験や気持ちの変化等を聞くことを通して、自分の行動や言葉の背景にある不安に気付かせ、遊びや話し合い等の中で、不安を言語化し、気持ちの安定につなげていく。 (★「2心理的な安定」「3人間関係の形成」)</p>
		<p>援助を求めたり依頼したりするだけでなく、必要なことを伝えたり、相談したりすることが難しい。</p>	<p>日常的に報告の場面をつくることや相手に伝えるための話し方を学習させ、ホワイトボードなどを使用して気持ちや考えを書きながら整理していく。そして、安心して自分の気持ちを言葉で表現する経験を重ね、相談することの良さが実感できるように指導していく。 (★「2心理的な安定」「3人間関係の形成」)</p>